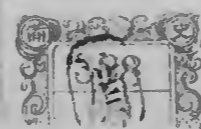


藩鑑

上杉

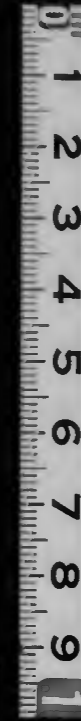
百五十四

庫	文	閣	内
一五九	三四六	二八〇	和書類
八	八二	冊	
園	號		
三			
四			
架			



内閣文庫

内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (154)
函號	159 1



389

小藩鑑卷之二百八十目錄

う部三

上杉弾正大弼藤原輝虎

12

12

藩鑑卷之二百八十

上杉彈正大弼藤原輝虎

一 天文十四年景虎公十六年正月朔日
高梨源吾頼治む左義化ちう後援を
約し浮雲を凌ぎて右勢を率し
磐石郡新山の城へ攻め入るを
經兵急に攻破り畠田和泉守秀中

とさうし城兵六百餘人を討つる公
大よき利あり雪我を獲て一たまふ
思まほし新山の城地はなほふらつけ
治ひふ月上旬景虎公下郡へ出馬
しりて新發田尾張も家臣と先隊に
定め安田村松の堡障を攻落しる村
松よをいて野木大膳亮を篠塚宗茂
分捕して四忠此面目を施すとれ

より黒瀧の砦へを廻る同廿六日
陣若我して金津伊豆も秀賀
命を預して凶賊敗亡して城陥るさ
ら北に長尾平六郎胎田常陸介ら
伴類棟人の旗は大抵唯伏し班
此所黨とつかしこの要害は據て或は
會津の輩名らついでに内藤の武藤に
引合せ時の機をうかすもつきて小

敵といへども一旦は根を断ちて
とて、系虎公府城へ振旅したまふ
この初は法新發田中條等に下郡
年物の術公の及ふところ松岩を盡
まらざる旨を仰合うられ八月山東より
急沼郡へ内旗を出され越後此縣
門を徑して信州村上義清を逐せしむ
族の郷村を乱妨し手動他を窺ひ

法
北越家書

一 天文十五年四月朔日系虎公佐渡國
と逃伐し法をんしめ出雲法より
發船したまふ宇佐義定行を誘せ
らるる陸戦の法を比して軍艦を以
隊を備へ小舟湊へ渡海して攻入るん
とあり彼國もも下尾佐渡を本向六席
古吏羽後こころを港通を亂極大徳

と張せあるの私れ自覺して得させ
しと彼をたう農氏高人寺法師
の中よもかひくしき者もそかり
集め湊へ中して賊を降へつけ
之しと私つきは櫓をゆる櫓をつき
並へて海岳しう系虎公ハ二陣の私
ふらうけりけは新橋をゆるし先隊
の私へ命を下され後砲を連ね歩

ししと私を向させ發せりしを降へ
たりしと私しと実践しと敵
強く防る先軍の一軍を加へ攻撃
へしと下知事しと諸將かしまりて
貴命を懸し昂ち魁首の私より敵
中へ後砲を連發して手機を繋ぎ
たりしと相戦ふと下尾を
向うく防ぎし味方屋敷をとりし

二陣の松より岡を發ししががまを降へ
致しうまをなかりて突てかゝる敵は
小群易くして忽ち敗北し水物を
さして引きうとて舟を甘粕連に小
條山くると逃して上道二里程逃ら
首とよること敵を知りて去らうとし
も敵あり返すこともしらんとも右に
將の人数さう隊を乱して是を逃し

他の備は整へて味方を發せし
慕ひしゆも下尾も地の利より
取て返し一軍といひかへともかゝる
して心も水物を逃れし味方
さうも返すに附入らせんと攻を
しとこゝろ城門の櫓より霧煙の
こぼれ灰砂をまきおとすこと透向も
ちけはれあつたの眼は入る進みぬ

しり系虎公不知く大新の城内より新
橋築るもとよりく一旦攻入ん
せハ人を損むへし先後陣を先隊へ
進めこれまて敵を退せり人較ハ跡
まらうて息をつくへしと仰られハ長
尾遠江守柳造系家河田親章一千
所騎と五隊は仰り陰陽奇正の備と
る螺吹て攻かるそととき総軍

一回は周の替をらけしりけまハ山公
小ひくも震動も敵をこれと氣を奪
それ志のくく防くも急るを見て先
隊の四将く引く跡の二将を入
替て城を系とせん擬勢をたつと
時日雨くかこふきけまハ軍ハ明日
くまハ系虎公山上に陣を居る
まハ長尾柳造河田の人較を移

攻はれしつらけき、東守の備をくそ
かゝり、庵子固て、敷うけよせん事とせらる
新發田栖吉長尾の黨加治石川竹股
色部中條一勢、後陣の旗旗堂、
とつき、これに下尾むかりきと也、思ひ
けん黎明、柳傍の陣へ、矢文を射
中し、降参を乞ける、おんその旨、徑せ
本陣を減少あり、それより、本陣羽茂

要害へ軍勢をさし、向ける、支士も
あつて、戈をくせり、怒り、降りけき、
公人質をもち、より集り、嚴制を示し

是れ、越後府へ帰帆し、流る同上

一、天文十六年、系虎十八年、成徳、
十四の夏より、以来五年の間、逆兵
等、よく討滅し、國中平均に
治り、その年八月廿八日、信州更科の

城を村上義清武田大膳大丈晴信
と教隆の戦ひに討負て力竭き牢
落の才となりて越後へもより系
虎を討つといふに我父祖より以来
公の父祖とたふひは武威を以てふる
年久しきふるも今その辱を顧み
降系とてふこと別事なりと其
十箇年以前より晴信と公戦を

より結ひ志ちて歎入といふも未
勝負を決せざるといふも同日二日信玄
大軍を率ゝて信州佐久郡志賀の
城を笠原新之助を退治せんといふ
身せ稲麻竹葦のこゝろより一搦に
攻前さんとて城中防ぎ歎入といふも
勇銳を碎れんといふも見えりしか
忽ち降系とて信玄といふも住せ

軍をとり甲府に引入のようすを
くらの功よきてとせしむるに
若殿をよけまゝ村上武田の家運
を決せんといひて藩代の家運
郷氏等を引き具し同月廿四日信州
上田系まで出陣せしむるに信玄
さきまゝてあつた所にあり
合戦を挑まんといふ味方案と相違

して軍卒大よ獲り味方をもよ操
崩れんといひ見せしむるに集一陣に蒐
出陣幣を取て士卒に下知して
いし今日合戦十九一生といひて
おのい定むるに敵多といひ百万
の勢をよけ攻めしむるにいふも
此場を去ていしむるに面をむく
いしむるに大着なみに士卒をとけ

まゝ千變万化若我をもといへも
大軍にこそこまゝに敗軍して去
念かゝり引くぞらと進退こゝに
まゝとまり今も下武軍門に來降し
公此庇蔭をたのむなり頼もしく公の
武威を以てふとこひ更科葛尾城
小帰候せしめり一世の厚恩に事
うこれと志くんといひけまは系虎

つゞくを分ていづく義清の憤り
察するに言語の外はあまうなへ
わくよ平う不存を讀むるを代れ
我父為京越中よといへ我死さ
そのもら逆所等らうして國家をわ
ふけんもも毛よよりて國をてに危
亡よ及へり幸よ來やうやく長
るうて五年の間とてこゝろく

討滅し國家を保有せり今見たり
は亡父孝養のしるしなり越中を
討ちしるし徳宅加賀越前をとり
入しそのち關東八州海東七州を
幕下し属せしり京師よのほりて
公方又偶見して一度天下の権柄を
取て其名を四海にひろいさんと欲を
是わら素心より志しれも我清の

心底を察するふたてこれを見止
ししるし志ししるし北陸道の發陣を
とりて武田晴信に對して一戦を
遂へしるし我清これを見しるし
在悦のしるしに感涙を催せり京虎
いしるし我多年甲州を限るも諸國
ふ間者といれをき國政の治乱軍
の勝敗を聞き我清は晴信は鐵術

軍法をつまひく見聞のせん悉く
演説をいまく我清谷をいらく凡そ
晴信の軍術はたよく漏船よのうて
風波を凌ぐくことよく大に慎み
つうて以て卒尔と我れをもといり
京虎のいよく彼は正兵なり我れ奇
兵を以て一途よまきみ弛りて是を
討んよまきくいなるといりおて

群臣をめぐりて議していよく吾亡
父のくらく越中を征伐せんを欲す
る此ところ村上我清幕下を降り
吾を頼むこと切くしていよく黙止
くく仍て越州出陣をいさく是を
晴信よ對し一戦をいけまさんと
おふたり志くれに越中征伐の儀を
志すく止ることを孝よ似たりと

くも我つ〜〜意とくふ義清ら
智謀と〜〜勇強人に起る
けまに彼を葛尾に帰城せ〜り
そのち吾先陣と〜て義濃尾張
ここの遠近の諸將を旗下の属せ〜
りん岡國の基〜よらり志らまは
子孫の父祖を孝ら〜これより
大なるそのら〜んやとヤヤれま〜

辭承りて感〜けるとら

戦後軍記
源信一代記

春日山日記

一 天文十六年 老所を〜集り合戦
の詳を〜手紙を奉る
其ときい〜定行を〜軍謀
を決定〜今を〜い〜為
十月八日九日十日の三日の中 信州
海野平に出陣〜〜家中の將

士との用をあるへいと相觸るるこゝろ
しき、戦兵八千雜をこぼし、既
十月八日にいりて先鋒を出陣し
九月、景虎出馬し、十日、雜を馱
馬發し、一、昂ち信州の境内に入り
て、晴信に服従せし人、此、願地とい、悉く
放火、乱妨をいまし、服従せし人の
願地、吳、織あ、く、味、方、と、あ、く、し、む

源信一代記

一、景虎公、老后を、ら、り、り、て、甲、信、に
討、入、し、んと、合、戦、の、件、織、り、老、后
を、あ、く、その、謀、織、を、さ、く、け、ぶ、て、ま、る
軍、織、を、決、定、し、ま、し、今、や、下、
て、い、く、當、十、月、初、旬、海、野、平、に、出、陣
し、一、家、中、の、將、士、を、あ、く、を、用、を
あ、る、へ、いと、相、觸、る、戦、兵、八、千、雜、を

法馬こぼれ無きまゝにして十月廿
ふりて先陣出陣も九日京虎と
由出馬らりて信州の境に入
て晴信の服従する諸士の順地を
こぼれ放火いまま武田の魔
下を無せざる人の願所は放火乱
妨に及ばざるまゝにこれ味方
に心を通せしめんとの謀略あり

源信一伝記
春日山日記

一十月十九日信州海野本小系虎着
陣去りまじ諸將物取をわけて軍の
備えを評議してそのうち宇佐貞定
行に密事を授け軍令決定も今
度の駄馬をわけるにたがひも同清
七席小命して駄馬の備は旗をより
五六町退きしるゝ陣氣を揚ぐへ

いり一番備ハ長尾政景ト古倉友人お
勤むへ一ツ命していさく一ツ限の
合戦ハ我家の法たりとむむとも退く
も他列の力をりりもへくも二番の
備ハ柳河和泉も直には心懐ち兼續大
岡飛騨も柴田道壽茅川播磨も安田
上総介等たり一ツ命して先づ
の戦士矢軍終りて後一同にさくみ

かりて乱戦もく一ツ我々の時晴信の
旗もよ駈入て急くもんてうん
二番備ハ旗もたり甘粕邊にちと上
田も命していさく我もとよさくみ
かゝるもは等ともにいさくもさくむ
へくもた、備をかゝり敵れもさくみ
まゝるを侍てもみやゝゝ類へへ一
四番備ハ村上義清との名將も梨

清野窪田等と公せて百五十餘騎
より外柵右馬先色敵一營を撃つ命
して敵と横公より誓いありは
汝等奇道よりこれと報へし今度
の後敵ハ長尾政系を命せしる政系
とて討死せし柳清代多し柳清
もまた討死せし柴田これを知る
へしと嚴重に下知したまひけり

戦後軍記

一十月十九日海野平に云陣一卯の
時より人数を繰出し己の刻を
て矢軍よりまはす晴信ハ二万餘騎
出して陣よりさす矢軍よりまはす
志しくついで先備兵士槍を
掲げ面もふしを撃つておはせ
なるをわけて次第にさすみか

晴信の勢鋒を公せしめて二町餘
引去る時先隊に大将長尾
政系らの思ひ急もなく敵の退く
勇みもみても幣をさうよて馬は
歎うつて諸卒を下知し經え急に
とひひんとも景虎公は花子と
見しきいなりを相もさひあ
先陣は泣かせ撞をあし命を

下して人数を引つけたまふ政系は
怒りいとも勝軍よのそみて人数を
引取たまふことはいさといくそや怒り
のしる字は政系は例は系をせ
いとも敵方先陣いさう破るは似
りといとも後軍を見るは晴信は
堅固よまのめその名勢嚴重なり
れして今日の公戦黄昏に及ま

んハ勝負終るゝも小雲を見し西を
催せうその上宵やみ多うこれを以て
あつ引元はつ勢を全くして陣營を
結ぶに志すもよひつてを以て政系も
道理に屈伏して怒氣をうけて兼て
定りつれごとく政系後殿とありて
去つて軍を引入りつて武田勢
喰もむことつて砥波の中継り

當家の軍法もて八千の勢一同に
返すつてと後もつとつて晴信も
良將たり飯富甘利以下能く當家
の兵畧を觀察もつて依て陣中堅く
令してさくきりあつたりけ合戦
午の卜刻に始りて申の上刻に畢り
陣營よ入りこの夜もつて景虎公此
營中に諸將をうけて軍の休戦

らう政景と柳清和泉も明日一戦を
遂げようと思つては必定由勝利疑ひ
ありへうと思つたり系虎公に任せを
なして支將のいふところをゆつ
んと後にはちと尋ねたまふ定行
中といふつゝ晴信の備えを
観察するも系虎公の勇氣驍勇と
らうとこゝろにちやうも碎きやう

流の形勢を知り此脱氣を命じて群を
接へんことを欲せざる不敗の
備を設けおいてあつて敵の術
見てもおれ一旦は武田勢を討
破るもいふも全く勝をとう語ら
らへうと思つたり幾度も對陣らうて
晴信を守るところは失らうてその
忘際らう時節を待て急ぐたふを

いよみ流り必勝利ありへし小利を
きうして大利を次よむること良將
の配之よしりしとより系虎公此言を
ききたまひむかりし信用ありて先
の將に嚴命を下して合戦を禁し
就虎の備をなして同月廿二日軍勢を
舉て越後國に兵をわけてたまふに
時ち長尾越前守後殿より晴信を

と慕ふ事なりやう甲府に軍を

お入らる春日山日記
越後軍記

一 天文十六年推名板垣甲斐左衛門
石動變同等兵を合せて六千餘越中
國を發し親知と子知とを駒返
し狗庄一かより入敷笠所の際難
を凌ぎ頸城郡北川の急を押し
あふれし川に松川久瀬川平川

のこ流落公異ある大河なるよ時しも
秋水漲り落ちて飛箭のことゝ敵勢
諸卒を不知ら賊を引包て討死
んと川涯より西よあふれる森の中に
奸兵を伏せ八町原退きく六備二
ふに分れ陣を張けり系虎公この
先よはしと石の條境を踏て来る
こと奇怪たり是をくめさせと松

きつよとせくことのみまひ五千原を
率せられ北川表へうち出でいま先
以て下倉共こち並つ甘糟七市ち並つて
軍監にをいさる女士池帰りて言よ
しけるいあふこの伎をうかふよ川を
去こと七八町のほとかり去れい味方
川を越ゆる向よ敵のかりあるん
ことあひもよとをきみやる川を

渡り由一戦勝利うらむさきうと
も公もさうら自うく大乍候よいて
たまひて彼支士をたれみ等者得
さうこしく敵の陣川を去こしと秘遠
くして古法よ消るう兵法に暗く
うふへうわう勢川を裁るを見そく
強合せんよ欲せに強強きううも並
志とらるうん又志つううわうあ

らにそくう味方うらわさるへくさ
らは假令魁えよ敵うら勝とら
も跡よりさむ旗本の新に
たまりもさうへくもまこと味方
必勝の道歴化くうさうかう松佐
板垣ハ異なる老兵さう椎名右坂
くも度この覺あるものもなれば
案さるよ敵伏勢を破け吾え川を

わづらひて向のきよよむらんころ伏兵
を起して備を乱しその場をめぐ
らむと一同に蒐りあつらんのとて
たふへへ率尔に川をわたりて
將命をおちりへへと作られし陣
帰りたまひ長尾系久高梨頼治
同姓政頼山村平賀等に七百餘を
とさし原松明をとるゝ連れさせ

その日の暮ころまてに上道一里餘
上れ瀬へとせし大舟を焚て諸軍強
らむとて向ひしと舟を敵に知
しめ公の陣常よ夜守の備をまよ
して煙火を停止したまひしれい
陣そのまきつらとて敵方差
も知くも上の瀬をちり居てふい
備を立替んと騒動もあつし味方の

透波敵陣へ志のひ入て子の刺を
うりにとかりて火をなすなりこれ
と見て上の瀬へおろくる人数同番よ
岡を發しひらりと川へうち入
けこに敵とをわらさせしとあひ
まへて防戦もその隙に旗を二千
除む陣の瀬を直にわらしと前後
より攻むれば敵兵いくとたまるへき

吾先まこ心もへかり敵をもんせし
て後所を山の中服高梨柳法
二宮等しむを逐ふこと甚急なり
園夜といひ險難といひ敵根掘り
谷に臨み流石に溺れ死傷もその
数を知りたまされも僻地のたぐひ
るれい長途に云用なりとて為難を
池との曉天をまら山向の霧晴て

のち斬獲此首級を換むるに凡
八百餘人と志るせう旗本よとひし
例え鬼小治承寺席五味止吉
大熊等しつともしも武勇とて何と
内感よ願ふる 北越家言

一 謙信のもとより、峯深の来より、士
らう罪ありて放年せしりよ、絨
中の権谷小奉公より、謙信越中へ

師を出たりしとき、彼士叢に隠れ
積砲を持ちうくとい、兵より俄
小積砲をかこよ、投捨て、返居り
謙信叱出し、い、峯深、
い、行に、さ、さ、り、先仁若智將
を討ち、ん、存せ、この悔
成り、今、る、見、先
を、刑の心、背、ま、か、る、殺

巧い中ことばよしあるき大衆心く
とく首を刎てくると云ていひ法
けもい謙信うち笑ひ吾々智仁とい
相懸せざる虚名なりとて地場りて
権名よろき事公せよと云けり
士越後より帰り農夫とてありて一生
と終りくろくとも

常山紀談

藩鑑卷之二百八十一目錄

う部 四

上杉弾正大廻藤原輝虎